令和元年度
No. 4
11月22日

全連小速報

全国連合小学校長会事務局
東京都港区西新橋１―22―14
電話　03－3501－9288
発行人 会　　長 喜名　朝博
編集人 広報部長 平川　惣一

「ふるさと　志　未来創造」

―ふるさとを愛し 志をもって 自ら新しい社会を切り拓く
子どもを育てる学校経営の推進―

第71回全連小研究協議会秋田大会成功裡に終わる

令和元年10月17日（木）・18日（金）　秋田県立武道館及び周辺会場

四季折々の美しい自然のある美の国、秋田県。久保田城を中心に発展してきた歴史ある城下町であり、今年市政130年を迎える秋田市で、第71回全国連合小学校長会研究協議会が10月17日（木）・18日（金）の２日間、全国から約2,300名の参加を得て、盛大に開催された。

本大会は、現在の研究主題を掲げた最後の研究大会となる。１日目は、開会式・全体会の後、13の分科会で「校長の役割と指導性」を究明するため「可視化しながら、考えを広げ深めよう」と思考ツールを活用し、活発な協議が行われた。２日目には「ふるさと　志　未来創造」をテーマとしたシンポジウムが、佐々木常夫氏・橋本五郎氏・丑田香澄氏の３名をシンポジストに迎え、行われた。開会式では、秋田出身の成田為三が作曲した「浜辺の歌」と、組曲「もうひとつの京都」の合唱が流れ、次期京都大会へと「志」のバトンが渡された。

大　会　主　題

新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進

～ふるさとを愛し 志をもって 自ら新しい社会を切り拓く
子どもを育てる学校経営の推進～

開　会　式

※開会の前に、台風19号によって亡くなられた方々に黙祷を捧げた。

1　開会のことば　　鬼澤真寿 大会副会長
2　国歌斉唱
3　あいさつ　　喜名朝博 大会会長
七尾尊志 大会実行委員長
4　祝　辞　文部科学大臣　萩生田光一様
（代読　文部科学省大臣官房審議官　矢野和彦様）
秋田県教育委員会教育長　米田　進様
秋田市長　穂積　志様
5　来賓紹介

変化を生み出し、新しい時代の義務教育の創造へ（要旨）

喜名朝博 大会会長

はじめに、先週末の台風19号によりお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げる。また、避難所運営にご尽力された校長先生方、教職員の皆様に敬意を表する。参加予定だったが、今回参加が叶わない校長先生方がいることを受け止め、気を引き締めて、今日からの学びを実現していきたいと思う。

さて、第71回全国連合小学校長会研究協議会秋田大会の開催に当たり、公務ご多用の中、文部科学大臣　萩生田光一様代理、文部科学省大臣官房審議官　矢野和彦様、秋田県教育委員会

教育長　米田進様、秋田市長　穂積志様をはじめ多数のご来賓の皆様にご臨席を賜った。会員を代表して、厚く御礼申し上げる。

新学習指導要領の全面実施まで半年となった。その準備が進む中、中央教育審議会では、「新しい時代の初等中等教育の在り方について」の文部科学大臣の諮問を受け、様々な議論が始まっている。全面実施の前に、これからの教育の在り方や教育課程の議論が始まっていることは、教育改革のスピードが加速していることを表している。

諮問の柱の一つである「新時代に対応した義務教育の在り方について」に対応して、新しい初等中等教育の在り方特別部会が設置されている。先ごろ、この部会から論点整理案が出され、義務教育の将来像として、次の２点が報告された。１点目は、子どもの学びの視点として、「多様な子供たちを誰一人取り残すことのない、個別最適化された学びが実現」している姿についてである。個別最適化を実現する方策としてＡＩやＩＣＴの活用が挙げられているが、その活用による授業改善が課題である。２点目には、子どもの学びを支える環境の視点として、「全国津々浦々の学校において質の高い教育活動を実施可能とする環境が整備」されているという将来像が示された。これは、これまで全国連合小学校長会が主張し続けてきたことである。公教育の質を担保するには、教育環境の整備が欠かせない。特にＩＣＴ環境の整備、地域間格差の解消が課題となる。同様に学校における働き方改革の推進は、教育環境の視点からも喫緊の課題である。義務教育、また小学校教育が大きく変わろうとしている今、我々はそのスタート地点に立っている。校長は、義務教育の方向性を見極めるとともに、現場としての考えを発信していかなければならない。

新学習指導要領のねらいは、変化に対応するのではなく、子どもたちが変化を作り、自ら未来社会の形成者になることである。これは校長も同じことである。変化を生み出し、新しい時代の義務教育を創っていくことが校長には求められている。そのためにも我々は学び続けなければならない。この秋田大会は正に校長にとって最大の学びの場である。大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を掲げる研究は、今年が最終年度であり、まとめの大会である。各分科会での価値のある提案と発表を基にした議論では、その価値を一般化する、自校に最適化して考えるという２つの視点が必要となる。さらに、その成果を各地で共有していくことが求められている。校長自身が主体的・対話的で深い学びを体現していかなければならない。

結びに、本大会の開催に当たり、ご指導、ご協力をいただいた秋田県、秋田県教育委員会、秋田市、秋田市教育委員会、秋田県市町村教育委員会連合会、秋田県ＰＴＡ連合会、秋田市ＰＴＡ連合会の皆様に厚く御礼申し上げる。また運営に尽力された七尾尊志大会実行委員長をはじめ、秋田県小学校長会、秋田市小学校長会の皆様に感謝を申し上げ、挨拶とする。

ふるさとから志をもって　未来創造へ（要旨）

七尾尊志 大会実行委員長

この度の台風19号により尊い命が失われるなど全国各地に甚大な被害が生じた。ここに謹んで哀悼の意を表すとともに、被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げる。

元号が平成から令和に代わり、次年度から新学習指導要領の全面実施を迎える節目の年に、ここ秋田の地で第71回全国連合小学校長会研究協議会並びに第59回東北連合小学校長会研究協議会を開催できることは、大きな喜び、誇りであり、意義深いものである。

「東北は一つ」のスローガンのもと、東日本大震災とそれに伴う原子力発電所事故をはじめとする被災各地における教訓と取組を共有し、たくましく生き抜くために必要な「生きる力」を確実に育むことが学校教育の責務と捉えている。併せて、「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、新しい時代に求められる資質や能力を子どもたちに育む上で、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善や各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立が急務である。このようなことから副主題を「ふるさとを愛し志をもって 自ら新しい社会を切り拓く子どもを育てる学校経営の推進」とした。本大会は、第65回三重大会から掲げてきた大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」による最後の研究大会となる。過去６大会にわたる研究成果を総括し、令和２年度、新たな大会主題で開催される京都大会への展望を明らかにする大会と位置付け、鋭意準備を進めてきた。

大会１日目の分科会協議では、「可視化しながら、考えを広げ、深めよう」と思考ツールを活用し、協議を深め、その発表にも思考ツールを使っていただく。大会２日目には、「ふるさと志　未来創造」をキーワードとして、秋田県に縁のある３名によるシンポジウムを開催する。

今、学校現場では働き方改革が叫ばれ、教育改革の動きも加速している。この研究協議会において、大いに語り合い、学び合うことを通して、明日の日本を担うたくましい子どもたちを育む教育を全国に発信していく起点となるよう、秋田大会が全国における教育の充実・発展に資する大会となることを願っている。

本大会の開催にあたり、ご指導とご助言をいただいた文部科学省、秋田県、秋田県教育委員会、秋田市、秋田市教育委員会、秋田県市町村教育委員会連合会、秋田県ＰＴＡ連合会、秋田市ＰＴＡ連合会をはじめ関係諸機関、また全連小役員、事務局および関係の皆様方に厚く感謝を申し上げ、挨拶とする。

文部科学大臣祝辞代読（要旨）

文部科学省大臣官房審議官　矢野和彦 様

この度の令和元年度台風19号によりお亡くなりになられた方々に哀悼の意を表するとともに、被災された方々に心からお見舞い申し上げる。また多くの学校で被災が確認されており、一日も早い教育環境の復興のため、文部科学省としても必要な支援をしていく。

新しい学習指導要領は、いよいよ来年度から全面実施となる。文部科学省としても、内容を円滑に実施し、児童の確かな学力を育むため、その趣旨の徹底や環境の整備に施策を講じていく。

近年、人口減少や就業構造の急速な変化、グローバル化、ＡＩなどの技術革新により、Society5.0の到来など大きな社会変化を見据え、子どもたちが人間ならではの強みを発揮し、自立的に生き、社会の形成に参加するための資質・能力を一層確実に育成することが求められている。

このため、４月に中央教育審議会に諮問し、新時代に対応した義務教育の在り方、教師に関する制度の在り方やＩＣＴを含む教育環境の整備など初等中等教育に関する課題について、幅広く議論いただいている。議論を踏まえ、新時代における子どもたちの学びを実現するため、文部科学省が一丸となってしっかりと取り組んでいく。

また、学校における働き方改革について、我が国の学校教育を持続可能なものとし、教師が児童生徒の指導に使命感をもってより専念できるよう、１月の中央教育審議会答申を踏まえ、文部科学省として条件整備に努めていく。授業とその準備、研修や児童と向き合う時間を十分確保できるよう、取組の徹底をお願いする。

秋田県教育委員会祝辞（要旨）

秋田県教育委員会教育長　米田進 様

この度の台風19号により亡くなられた方のご冥福をお祈りするとともに、被害を受けられた方々に心からお見舞いを申し上げる。救援や復興支援などの活動に尽力されている方々に深い敬意を表すとともに、１日も早い復旧、復興を願っている。

いよいよ来年度から新しい小学校学習指導要領が全面実施となる。今回の改訂の背景の一つには、私たちの予測を超えて進展する情報化やグローバル化等の社会的な変化への対応が挙げられている。これからの時代を生きる子どもたちがこの変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合い感性を働かせながら、より良い社会と幸福な人生の作り手となっていけるようにすることが重要になる。内容に目を向けると、中学年の外国語活動、高学年の外国語科の新設が挙げられる。これは、外国語で様々な人々とコミュニケーションを図る能力の基礎的な力を育成するためである。子どもたちが将来どのような職業に就くにしても、生涯にわたる様々な場面で必要であると想定されることから設定された。また、今後生活の中に一層浸透してくる情報技術を子どもたちが適切に選択・活用できるようプログラミング教育も必修化となった。各学校では、これらの改訂について準備に余念がないと思われる。また、学校現場においては教育課程のみならず、不登校やいじめなどの生徒指導上の諸課題、虐待や貧困、教員の働き方改革など、対応すべき喫緊の課題が山積しており、学校経営の責任者としての校長の役割、指導力が一層重視されている。

本県においては、令和２年度から実施する「第３期あきたの教育振興に関する基本計画」を策定中である。これまでと同様、「ふるさとを愛し、社会を支える自覚と高い志にあふれる人づくり」を目指した取組を進めていく。各学校においては、「『問い』を発する子どもの育成」を全ての教育活動を通して取り組む最重点の教育課題と位置付け、問題を発見し、他者との関わりを通して、主体的に問題を解決していく児童生徒を育てようと、それぞれの特色を生かしながら日々励んでいるところである。県教育委員会としても、本大会の協議での様々なご意見や研究の成果を生かし、本県の小学校教育の一層の充実・発展に努めてまいりたい。

秋田市長祝辞（要旨）

秋田市長　穂積志 様

全国連合小学校長会秋田大会が盛会に開催さ

れることをお慶び申し上げ、ご来衆の皆様を31万市民共々心から歓迎申し上げる。台風19号でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りし、被災された皆様に対し１日も早く復旧、復興ができるようお祈りしている。

秋田市も宮城県丸森町に翌日消防隊員を23名派遣した。いわき市とも協定を結んでおり、断水状態にある中で給水車やペットボトルを届けた。秋田市は宮崎市、金沢市、船橋市、和歌山市と災害時の応援協定を結んでいるので、連動しない地区の発災時に駆け付けることになっている。最近の災害状況を見ると激震化、頻発化の傾向にある。校長先生方においても新たな事態への安全・安心な対処について頭を悩ませ、心砕いていることに頭が下がる。

秋田市においては、先生方に特に学力の向上といじめ等の教育の根幹に先進的に向かい合ってほしいと考え、多忙化防止計画を策定した。また、給食の公会計の実施、人口減少に伴う統廃合の基本計画の策定など課題の解決を行っている。

秋田市は初代藩主佐竹義宣公が築いた久保田城を中心に発展してきた、歴史ある城下町である。大会後に文化を継承する施設を訪れていただきたい。

大会の成功と皆様のご多幸を祈念し、歓迎の挨拶とする。

文部科学省講話（要旨）

文部科学省大臣官房審議官　矢野和彦 様

１　中央教育審議会への諮問について

４月17日に中央教育審議会へ文部科学大臣から「新しい時代の初等中等教育の在り方について」という大きな範囲での諮問を行った。現在の学校教育の成果である世界トップレベルの学力水準は、知・徳・体を一体で育む「日本型学校教育」によるものであり、教師の献身的な取組が支えてきた。しかし、社会の急激な変化とともに、語彙力や読解力の課題、いじめの重大事態や児童虐待事案、ＩＣＴ環境の脆弱さ、教師の採用選考試験の倍率の急落など、問題も顕在化しており、これらを「日本型学校教育」との関係でどう考えるか、また、Society5.0時代の教育・学校・教師の在り方を踏まえ、諮問を行った。その内容には、義務教育、高等学校教育、増加する外国人児童生徒等への教育の在り方、教師と教育環境の整備の４項目あるが、今回の１番のテーマは教師である。

新時代に対応した義務教育の在り方としては、例えば小学校５・６年生で教科担任制を導入していくため、条件整備を考える。これからの時代に応じた教師の在り方や教育環境の整備等においては、教科担任制導入も踏まえた教職員配置や教員免許制度、研修・勤務環境・人事計画など多岐にわたっている。

２　学校における働き方改革の推進について

学校における働き方改革の目的は、教師がいつもはつらつとしていて子どもにもっと向き合う時間を確保することである。校長による時間管理や、学校や教師の仕事の負担軽減の分析、統合型支援システムの活用による成績処理など、ありとあらゆることを動員して働き方改革を進めていくしかない。１月に示した「公立学校の教師の勤務時間の上限に関するガイドライン」では「在校時間等」という新しい概念を示した。ガイドラインに強制力はないが、法律改正により法的根拠を与える。

１月の中教審答申「一年単位の変形労働時間制の導入」は、例えば３月４月の土日勤務の代休を７月８月に取ることができるということである。法律を受け、各都道府県で条例を定めるかどうか、市町村教育委員会がどう考えるか、最後に各学校がどう考えるか、現場の選択に委ねられている。長時間勤務の固定化を心配する意見もあるが、現場に一つの選択肢が増えるものである。働き方改革に決定打はない。答申にある中身を一つ一つ実施することによってしかできないと考えている。

３　教師の資質能力の向上について

教員採用試験の倍率の低下、教員の質の低下が言われている。今の採用倍率は３倍前後であるが、バブル期の平成３年、第２次ベビーブームの昭和54年も倍率は同程度であった。人手不足と適齢人口の減少はどの業界でも同じであるが、教員採用試験は比較的健闘していると思われる。教職員定数改善に関わるため、教師という職業の魅力を若い人たちに伝えていただきたい。

４　教育の情報化の推進について

情報活用能力については、言語能力と同様に学習の基盤となる資質・能力として位置付けている。つまり、情報活用能力は、読み書きそろばんと同レベルである。プログラミング教育は多くの学校が取り組んでいるが、国際比較ではＩＣＴの活用状況が日本は大変遅れている。ＰＩＳＡ調査での読解力の低下は、コンピュータを使った試験の影響もあるため、その対策も行う。義務教育の精神に反し、ＩＣＴ環境の整備状況については全国で格差がある。ＩＣＴ環境の整備には一刻の猶予もないので、先生方から自治体の長や教育長に訴えていただきたい。

文部科学省としては21世紀の子どもをどう育てていくか、先生方とともにしっかりと考えていきたい。

第１日　全　体　会

1　日程説明　近野良浩 大会実行副委員長
2　運営委員会構成
3　本部報告
4　大会主題・研究課題趣旨説明
5　大会宣言に関する提案

本部報告（要旨）

大字弘一郎 対策部長

５月21日に第232回理事会を行い、正副会長・常任理事の互選及び監事の選出、第71回総会議案について了承された。

５月22日の第71回総会・研修会では文部科学副大臣浮島智子様をはじめ来賓より祝辞をいただき、５つの議案が承認された。午後の研修では、文部科学省初等中等教育局教育課程課長滝波泰様の講演、文部科学省各課による行政説明が行われた。

７月８日、正副会長・常任理事が、文部科学省・財務省・総務省を訪れ、各大臣・副大臣・政務官・省内各課長に対し、小学校教育の充実に関する文教施策並びに予算についての要望書を提出した。

７月９日、小学校長会長連絡協議会は、「学校における働き方改革」の推進について、文部科学省初等中等教育局財務課長合田哲雄様より行政説明が行われ、それを受けて各都道府県の推進のアイディア交流を行った。

また、７月８日、被災３県小学校長会長との合同連絡会を行い、福島県・宮城県・岩手県各会長からの報告、協議・情報交換を行った。

大会主題・研究課題趣旨説明

大友智加司 秋田大会研究部長

大会主題を「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」とし、平成25年度の三重大会から各大会の成果と課題を引き継ぎながら研究を進めてきた。この間、豊かな創造性としなやかな知性を発揮し、互いの個性や絆を大切にする社会に貢献できる日本人の育成を目指してきた。

秋田大会ではこの大会主題を受け、副主題を「ふるさとを愛し 志をもって 自ら新しい社会を切り拓く子どもを育てる学校経営の推進」とした。設定の背景には社会の変化が複雑化・多様化し、将来の予測が困難な時代を迎えていること、少子高齢化や人間関係の希薄化、貧困問題など子どもたちを取り巻く社会環境が変化していることなどがある。さらに、東日本大震災と原子力発電所事故、全国各地での災害からの復興の長く険しい道のりなど、学校教育を円滑に推進する上で課題は多岐にわたっている。こうした状況のもと、「生きる力」の理念の具体化と教育課程の課題を踏まえて学習指導要領が改訂され、来年度から全面実施となる。

この先行き不透明な時代を生き抜くためには、子ども一人一人がこれからの社会を担う志をもち、新たな知を拓く創造的な思考力・判断力・表現力、しなやかな知性を身に付けることが不可欠である。また、郷土や我が国に誇りをもち、他者と協働して新しい社会を切り拓き、積極的に国際社会に羽ばたいていこうとする気概を培うことも必要である。これらの実現のために、子どもたちが人と人との絆を実感し、ふるさとへの愛着心を深めながら、我が国や国際社会の発展に視野を広げ、主体的に新しい社会を創造していこうとする意識を高めるための学びの場づくりが重要である。

我々校長には、ふるさとを愛し、志をもって、自ら新しい社会を切り拓いていく子どもたちを育てるために、社会に開かれた教育課程の具現化を図るカリキュラム・マネジメント力が求められている。すなわち、必要な資質・能力を明確にし、ふるさとを愛する心を育む学びを起点として、社会と協働して教育活動の充実を図っていかなければならない。

また、分科会協議では、校長の果たすべき役割と指導性の究明に向け、これまで熱心な協議が行われ数々の成果を得てきた。本大会では協議内容を可視化しながら考えを広げ深める手法である「思考ツール」を活用し、さらなる深まりを目指す。発表時も「思考ツール」を活用する。

本大会は、三重大会から７年間の研究の成果を総括するとともに新たな大会主題で開催される次回京都大会への展望を明らかにする大会でもある。参加者の力を結集させ大会を充実させてほしい。

＜分科会の研究課題及び研究の視点＞

Ⅰ　学校経営

第１分科会「経営ビジョン」

研究課題：未来を見据えた魅力あるビジョンに基づく学校経営の創造
視点１：未来を見据えた魅力ある学校経営ビジョンの策定
視点２：学校経営ビジョンに基づく創意と活力に満ちた学校経営の推進

第２分科会「組織・運営」

研究課題：学校経営ビジョンの実現を図るための組織づくりと組織運営
視点１：学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくり
視点２：組織を積極的に運営していくための具体的方策の推進

第３分科会「評価・改善」

研究課題：学校教育の充実を図るための評価・改善の推進
視点１：学校経営の組織的かつ継続的な改善に向けた学校評価の充実
視点２：教職員の資質能力の向上に向けた人事評価の工夫

Ⅱ　教育課程

第４分科会「知性・創造性」

研究課題：知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント
視点１：しなやかな知性と豊かな創造性の育成
視点２：新しい社会を切り拓く子どもを育てるカリキュラム・マネジメント

第５分科会「豊かな人間性」

研究課題：豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメント
視点１：豊かな心を育む道徳教育の推進
視点２：よりよい社会を創る人権教育の推進

第６分科会「健やかな体」

研究課題：健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント
視点１：生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力を育てる教育活動の推進
視点２：健康で安全な生活を営む実践力を育てる教育活動の推進

Ⅲ　指導・育成

第７分科会「研究・研修」

研究課題：学校の教育力向上を目指す研究・研修の推進
視点１：学び続ける教員像の確立を目指す研究・研修体制の充実
視点２：「チーム学校」の経営意識をもたせる研修の推進

第８分科会「リーダー育成」

研究課題：これからの学校運営を担うリーダーの育成
視点１：学校教育への確かな展望をもち、優れた実践力と応用力のあるミドルリーダーの育成
視点２：社会の変化に主体的に関わる人間性豊かな自ら学び続ける管理職人材の育成

Ⅳ　危機管理

第９分科会「学校安全」

研究課題：命を守る安全教育・防災教育の推進
視点１：自ら判断し主体的に行動できる子どもを育てる安全教育・防災教育の推進
視点２：家庭や地域社会との連携を図った意図的・計画的な防災に関わる取組の推進

第10分科会「危機対応」

研究課題：様々な危機への対応と未然防止の体制づくり
視点１：いじめ・不登校等への適切な対応と体制づくり
視点２：高い危機管理能力の育成と未然防止に向けた組織体制づくり

Ⅴ　教育課題

第11分科会「社会形成能力」

研究課題：社会形成能力を育む教育活動の推進
視点１：社会の発展に貢献する資質・能力や態度を育む教育活動の推進
視点２：地域に愛着をもち、よりよい社会の創造に貢献する力を育むキャリア教育の推進

第12分科会「自立と共生」

研究課題：自立と共生の実現に向けた実践的な態度や能力を育む教育の推進
視点１：子どもの自立や社会参加に向けた特別支援教育の推進
視点２：持続可能な社会の担い手を育む環境教育の推進

第13分科会「連携・接続」

研究課題：家庭・地域等との連携及び協働と学校段階等間の接続の推進
視点１：家庭・地域等との連携及び協働を深め、創意ある教育活動を展開する学校づくりの推進
視点２：成長の連続性を生かした学校段階等間の接続の推進

第2日　全　体　会

1　研究協議のまとめ
2　大会宣言

小山清博 大会宣言文起草委員長

研究協議のまとめ

大友智加司 秋田大会研究部長

1　分科会協議

【経営ビジョン】目指す子ども像や生き方像、新しい時代の社会像などに向かって、教育や学校の在り方をマネジメントしていく。校長がリーダーシップを発揮して社会に開かれた教育課程を実現することが必要である。

【組織・運営】活力ある組織づくりのために、学校課題の共通認識、教育計画の意義や必要性の理解、良好な人間関係づくりが大切である。組織運営の際、具体的な目標設定と評価が、教職員の専門性の向上や参画意識の高揚に効果的である。

【評価・改善】学校評価の充実のために、校長の明確な方針の提示、情報発信、評価結果を活性化につなぐ具体的な取組、評価者意識の改善が大切である。人事評価の工夫では、経営構想や重点目標と一体となった自己目標の設定、学校評価との連動、客観性・公平性・納得性の確保が大切である。

【知性・創造性】生きる力を育む学習指導を創造するために、学習活動の連続性や指導力を向上させる取組が大切である。新しい社会を切り拓く子どもを育てる学校づくりのためには、教職員の意識を変えることや協力体制の構築、機能的な組織づくり、小・中、家庭・地域との連携が重要である。

【豊かな人間性】道徳教育の推進について、校長がリーダーシップを発揮して全教職員で重点目標や重点内容項目の共通理解を図ること、保護者や地域と協働することが大切である。人権教育の推進では、人権が尊重される学習活動・人間関係・教育環境づくりが重要である。

【健やかな体】できた喜びを味わわせる体育授業の充実、家庭や地域の教育力の活用、子どもたちが楽しくスポーツに取り組むきっかけづくり等の工夫が大切である。カリキュラム・マネジメントの重要性を認識し、新たな考えを積極的に取り入れたり効果的な改善の方策を探ったりするなど、その方向性を明確にしながら、学校や地域全体で組織的に取り組む。

【研究・研修】教員が学び続けるために、意図的な研修会の開催、目標管理システムの活用、授業力向上への意欲を大切にした校内研究の推進などが必要である。専門性に基づくチームの構築、グランドデザインの提示による学校マネジメント機能の強化、教職員一人一人の力及び同僚性が発揮できる環境整備などが「チーム学校」の経営意識をもたせるために重要である。

【リーダー育成】ミドルリーダーや管理職人材の育成のために、教員育成指導指標等に基づき、各キャリアステージを踏まえたメンターチーム方式による研修、やりがいと成就感をもたせる校務分掌、評価面談での意識付け、意図的で将来を見据えた研修会の開催などが必要である。

【学校安全】安全教育・防災教育の推進のために、自分ごととしての防災意識の向上、各教科等との関連を図った体験活動の充実、校長会の働きかけによる防災システムの確立、地域・関係機関と連携・協働した実践的な防災訓練などが重要である。

【危機対応】危機を想定した実践的な研修、組織的な支援体制の整備、ＰＤＣＡサイクルによる改善、危機管理マニュアルと学校安全計画の整備、外部人材の活用や関係機関との連携などが必要である。

【社会形成能力】校長自らが社会形成能力を明確に捉えて、具体化・焦点化した上で経営ビジョンに反映させ、組織的・協働的な取組を推進する。小中９年間を見通した指導計画の作成、地域の関係機関との連携などが重要である。

【自立と共生】特別支援教育の推進では、体制の整備、教職員の意識改革のための協働、関係機関との連携が大切である。環境教育の推進では、全教育活動を通した計画的・系統的な実践、必要な教育資源の確保、地域の特色を生かした継続的な取組が重要である。

【連携・接続】家庭・地域等との連携及び学校段階等間の接続の推進のために、地域とともにある学校づくり、コミュニティスクールの活用、地域の教育資源の活用、小中連携などが大切である。

2　まとめ

本大会では、「思考ツール」の活用により、各分科会における校長として果たすべき役割と指導性を可視化し、協議を深めることにつながった。また、協議の発表においても焦点化が図られた。参会者の理解と協力により大きな成果を得ることができた。新学習指導要領について改訂の趣旨や内容を十分に踏まえるとともに、今回の協議のキーワードやキーセンテンスに基づき、より一層リーダーシップを発揮されたい。

本大会主題での７年間の研究の成果と課題が新たな大会主題で開催される京都大会に引き継がれ、さらなる大きな成果が得られることを祈念して協議のまとめとする。

大　会　宣　言

全国連合小学校長会は、結成以来、我が国の小学校教育の充実・発展のため、真摯に研究と実践を重ね、着実にその成果を上げてきた。

第65回三重大会から掲げてきた大会主題「新たな知を拓き　人間性豊かな社会を築く　日本人の育成を目指す小学校教育の推進」による最後の研究大会となる本大会では、大会主題の実現を目指し、過去６大会にわたる研究成果と課題を引き継ぎ、組織をあげて鋭意努力して取り組んできた。

現代は、知識基盤社会の新たな進展やグローバル化の進行、世界に類を見ないスピードで進む少子高齢化により、先を見通すことが困難な時代を迎えている。このような中、我が国では、今後の社会の方向性として「自立」「協働」「創造」の三つの理念の実現に向けた生涯学習社会を構築することが求められている。一方、来年開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けて、各分野で様々な取組が行われている。教育においては、新しい時代に求められる資質・能力を育成する新学習指導要領の着実な実施に向けて、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善や各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立等が求めれている。

こうした国の動向を注視しつつ、東日本大震災とそれに伴う原子力発電所事故をはじめとする被災各地域における教訓と取組を共有し、社会において自立的に生き抜くため必要な「生きる力」をバランスよく確実に育むことが学校教育の責務である。併せて、これからの社会を担う志をもち、社会の変化に主体的に関わり、問題解決を図る創造的な思考力やしなやかな知性といった、新たな知を生み出す力を身に付けることも求められている。そのため、小学校教育においては、ふるさとを愛する心を育む学びを起点として、他者と協働して、理想とする生き方を追及し続ける志をもち、自ら新しい社会を切り拓いていこうとする子どもを育成することが重要である。

私たち校長は、秋田大会における副主題「ふるさとを愛し　志をもって　自ら新しい社会を切り拓く子どもを育てる学校経営の推進」を基盤に据え、小学校教育の推進に全力を傾注し、国民の信託に応えようとするものである。

ここに、第71回全国連合小学校長会研究協議会の総意に基づき、次の決意を表明し、その実現を期する。

記

一、新たな知を拓き　人間性豊かな社会を築く　日本人の育成を目指す小学校教育の推進
一、ふるさとを愛し　志をもって　自ら新しい社会を切り拓く子どもを育てる学校経営の推進
一、「生きる力」の育成を目指した創意工夫ある教育課程の編成・実施・評価・改善
一、道徳教育を中核とし、命の尊厳を重視した心の教育の一層の充実
一、主体的に判断・行動し命を守る子どもを育成する防災教育の推進
一、学校の自主性・自律性の確立と家庭・地域社会との連携・協働による教育活動の充実
一、安全で安心できる教育環境づくりの一層の推進
一、校長自らの研鑽と、教職員の資質・能力の向上を図る現職教育の充実

右、宣言する。

令和元年10月18日

第71回全国連合小学校長会研究協議会秋田大会

シンポジウム（要旨）
「ふるさと　志　未来創造」

全連小調査研究部長代理　　平川惣一

シンポジスト
(株)佐々木常夫マネージメントリサーチ
代表取締役　佐々木常夫氏
読売新聞特別編集委員　　橋本五郎氏
元五城目町地域おこし協力隊
内閣官房ふるさと活性化支援チーム委員
丑田香澄氏

コーディネーター

平川　このシンポジウムでは、「ふるさと」「志」「未来創造」という視点で３人にお話しいただく。早速、ふるさと秋田から、どのような影響を受け育ったのか、子どもたちがふるさ

とにどのように関わっていけばいいのか、「ふるさと」という視点からお話しいただきたい。

佐々木氏

佐々木　秋田市は自分の原点であり、影響を与えてくれた多くの人たちがいる。父を早くに亡くしたが、たくさんの親戚が親のように可愛がってくれた。

ふるさと愛は育てるのではなく、振り返った時に自然と育まれているものである。秋田には素晴らしい自然があるが、自分を育ててくれた人そのものがふるさとである。慈愛に満ちた人たち、特に、母親や親戚、生きる基本を教えてくれた教師の愛が、私のふるさとへの愛情になっている。

ふるさとへの活動として、文化面で支援するための秋田文化会議の世話人、秋田産業サポータークラブの幹事、秋田市・いかほ市の観光大使を務めている。これからの秋田には、誰かからの支援ではなく、自分の意欲や努力で変えていくことを期待している。

橋本　私にとってのふるさとは自然である。私は八郎潟の東のほとりで育った。思い出されるのは、10歳上の兄が、囲炉裏の脇で１枚の板を自分の膝に乗せ、机代わりにして受験勉強をしていたことである。また、１枚のわら半紙を３回使って、紙を大事にして受験勉強をしていたことが心に残っている。

丑田　五城目町から来た小学校３年生の娘の母である。私自身秋田市の小学校を卒業した。５年半前にＵターンをし、地域おこしの活動をしている。

ふるさとは、やはり人との出会いであり、その人たちの言動が人格形成に大きな影響を与えている。子どもたちが人と出会い多様性が広がることは、ふるさとを思い出し、大人になり何らかの形でふるさとと関わりたいという時のきっかけになるのではないかと思う。

ふるさとへの愛郷心は、ふるさとは素晴らしいと無理に育むのではなく、振り返った時に自然と育まれていくものと考える。私自身アメリカでの留学経験やホームステイの受入れの経験から振り返ると、ふるさとだけを見つめるのではなく、むしろ世界に目を向けてみると、ふるさとの魅力にも気付く。

また、ふるさとは自然環境だと思う。子育てを始めると我が娘にも雪の中で遊ばせたいと思った。秋田の四季折々の美しさの貴重さを感じる。

平川　次に「志」について、志を高く掲げて自立していくために必要な力とは一体何か、人との関わりや出会いなどこれまでの歩みなどから、お話しいただきたい。

丑田　私は、平成24年に出産後の母親を支援する法人を起業した。起業する友人などの多様な人たちとの出会いの中で、起業は特別な選択肢ではなかったし、夫が私より先に起業したことも大きい。また、仕事上場所の制約が無いことに気付き、故郷で仕事をすることができると考え、一家で秋田に移住した。そして、平成26年から志をもって「世界一子どもが育つまち」という大きなスローガンを掲げて、「五城目町地域おこし協力隊」の仕事を始めた。五城目町の活動を国全体の地方活性化施策に生かしてほしいとして、今年度、内閣官房ふるさと活性化支援チーム委員に就任した。

丑田氏

自分のできることを世の中に何らかの形でシェアしていくことができたらという思いをもちながらも、人との縁を通じた機会に真摯に向き合い続けたことが、さらに縁につながった。志の大きさとは、事業が小さくても日本や世界をよりよくしていくことができると信じることであると考える。

佐々木　子どもが３人おり一番上の子が自閉症である。育てていく上で支えとなったのは、母からの「自分の運命を受け入れなさい」という言葉である。もう一つは学校教育である。小中学校では生きるための基本を教えてもらった。志の基盤は家庭と学校の教育である。この基盤があって世の中に出て行くが、社会に出てからの学びも重要である。日々の仕事の中で自分を成長させるという志を持ち続けられるかということである。

私が感銘を受けた本を２冊紹介する。一冊目はキングスレイ・ウォード『ビジネスマンの父より息子への30通の手紙』である。人間として、夫として、父として、企業人として真っ当な人間になるにはどうしたらよいかが書かれている。私は父を知らないので、父親とはこんなに優れているのか、１人の父親は100人の教師に勝るというぐらいに感じた。二冊目はケント・Ｍ・キース『人生の意味を見つけるための逆説の10ヵ条』。「それでもなお」という言葉が印象的である。20代の方が書いたものだが、私にとっては自分の哲学、生き方を教えてくれた。

橋本　私の志は３つある。はじめに、私が新聞記者を志ざしたきっかけは、Ｊ.Ｆ.ケネディ大統領の最初の試練であったソ連のフルシチョフ書記長に論破された会談にある。会談の中身を最初に打ち明けたのは、ニューヨークタイムスの新聞記者であった。新聞記者はすごいと思っ

た。また、ベトナム戦争が激化する中、日本の新聞記者はベトナムに和平をと世界中に伝え回った。そうしたことを知り、新聞記者になりたいと思った。新聞記者を辞めたいと思う時があるが、「世の中のなぜに答えること」「自ら主張するすべをもたない人の味方になること」の初心の２点にいつも立ち返る。

次に、秋田高校２年の時に赴任された校長先生の言葉である。「君たちはいつどこで、誰に『汝、何のためにそこにあるや』と問われても直ちに断言できる人間になりなさい」は、何かを行動する時に、いつも頭の中に思い出される。

最後に、山本周五郎『ながい坂』の理不尽を許さないと自分の中で終生持ち続ける主人公の苦労を追体験している。自分が一番辛い時に勇気付けられる本である。ここに私の志、原点がある。

平川　皆さんが描かれるこれからの日本や世界の姿、若い世代がその将来をどう見つめて行動をとっていけばよいか、校長はどのように役割を果たせばよいかについて「未来創造」という視点からお話しいただきたい。

橋本　私の人生の師は母親である。母は電気釜もない頃、午前５時半に家を出る父に合わせて、子どもの分を含め毎朝７つの弁当を作っていた。決して子どもたちに苦労したことを言わず、誰よりも遅く寝て、誰よりも早く起きる母だった。そんな母から49年前に言われた３つの言葉がある。１つ目は「何事にも手を抜いてはならない。常に全力で当たれ」２つ目は「傲慢になってはいけない。常に謙虚であれ」３つ目は「どんな人も嫌いになることはない。自分よりすぐれているものがあるかどうかを見よ」１日たりとも忘れたことはない。お天道様が見ている。どこで何をしても見られていると思い、恥ずかしいことはできない。母親は絶対である。

橋本氏

また、一番基本はこの世には自分には敵わない存在がいる。どうしてもこの人に近付きたいという思いをもたせる偉人教育をやらなければいけない。それで謙虚になる。

福沢諭吉の「ひゞのをしへ」という教訓集がある。そこに７つの徳目があるが、学力よりこの徳目さえ教えれば、教育はこれで十分である。この徳目を子どもたちが毎日見る環境を作ってほしい。

丑田　環境が刻々と変化し、ますます多様な生き方が広がる激動な時代の舵取りをしていくのが次世代である。こうすべきという枠というものを取り壊していかなくてはいけない。自由で柔軟な捉え方をすることが求められる。少し前には考えもつかなかった仕事がどんどん生まれている。新しいものを生み出す力だとか、一人で生み出すのではなく協力したり刺激し合ったりしながら、みんなで作り出す力だとかが未来創造という点で若い人たちに必要となる。

秋田県では有名な「なべっこ遠足」がある。ただ衛生概念だとか、どの班も平等に同じ鍋を作らねばならないという社会変化から、みんな同じ食材セット、手順で作るので、どの班も均等な味の鍋になっている。しかし、大人が多少のリスクを背負ってでも、失敗した班も学びになったねと思い切って子どもたちにやらせてみるのが素晴らしいのではないか。

先の読めない激動の時代を必要以上に悲観するのではなく、自己肯定感を醸成する学校、家庭、地域は、変化の土台になると信じている。学校の先生方の日頃の努力に感謝し、学校という場所の無限の可能性を日々感じている。先生方がもっているワクワクを子どもたちも敏感に感じている。大人たちが子ども心を忘れずに、純粋にワクワクと創造力を爆発させるような姿を見せ続けることが子どもたちの未来に一番繋がるのはないか。

佐々木　未来創造とは、豊かでみんなが幸せを感じる社会を作るべきだと考える。

横浜市の教育ビジョンの作成に携わったことがあり、子どもに身に付けてほしい視点は５つあると考えた。①自分で生きていく知　②豊かな心、人を敬う心　③健やかな体をつくる　④地域、国を愛し他者と協働する公共心　⑤未来をつくる志。自分は、いつもは３つにまとめるが、教育は多くの期待がかかっていたり、多面性があったりするので増えてしまう。すべてを身に付けてほしいとは思わない。このうちいくつかはやってほしい。そのための教育の方向性として、①子どもの可能性を広げる　②魅力ある学校で、教員が生き生きと働く　③社会全体で子どもを育むという３つを挙げる。

学校にはマネジメントが必要である。それは校長先生の役割であり、何が重要で何をやらなくていいのか基準を示すことである。重要な仕事である授業、子どもと向き合うことに時間をかける。いろいろな問題は起きるが、一人一人の教員に任せておくのではなく、校長がその対応・処理に配慮しなければならないと考える。

閉　会　式

1	あいさつ	喜名朝博 大会会長
		七尾尊志 大会実行委員長
		杉森徳行 次期開催地代表
2	閉会のことば	稲森歳和 大会副会長

第233回　理　　事　　会

10月16日（水）午後１時45分開会　　ホテルメトロポリタン秋田　グランデＡ

司会　佐藤 庶務部長

１　開会のことば　　鬼澤 副会長

２　会長あいさつ（要旨）　　喜名 会長

今回の台風19号によりお亡くなりになった多くの方々のご冥福をお祈りする。また、被災による休校や避難所運営に尽力された校長・教職員の皆様に敬意を表する。今回の理事会や明日の全国大会には、そのような事情で参加できない会員もいるが、気持ちを引き締め充実した会にしたい。明日の開会式では、冒頭に黙祷を行う。

⑴　組織及び運営ついて

以前から全国連合小学校長会の組織及び運営について協議をしている。負担金は令和４年度値上げを目指して準備を進めていく。あわせて理事数の変更や各部内の委員会の在り方等についても検討する。負担金の改訂については、常任理事会、理事会等で話を進め、逐一報告する。

⑵　三地区対策・調研担当者連絡協議会について

９月10日に東京・大阪・福岡の三地区で協議をもった。調査研究担当者の会では、全国学力・学習状況調査の取組について協議した。調査は学力の一部でしかないが、学力のすべてのようにとられていることが懸念される。全連小としても文部科学省の担当者と話合いをもち、調査の在り方を含めさらに意思表明をしていく。

また、ＩＣＴ環境や働き方改革に関する人的措置の在り方等については、考え方や取組状況が自治体によって異なり、地域間格差が広がっていることがわかった。中央教育審議会のある委員会では、特にＩＣＴのように全国一律にしっかりと整備するべきものについては、国がすべて整備しなくては世界から取り残されたままであるという発言もあったと聞く。

教科担任制や専科の在り方についても自治体によって捉え方や取組状況が違う。今後、高学年の教科担任制が始まる方向である。文部科学省の概算要求にある2,000人の専科加配は純増でなく、今までの指導方法工夫改善を付け替えることにより、教員の持ち時数を減らす方向に話が進んでいる。

⑶　中央教育審議会の審議状況について

４月17日に諮問され協議が進んでいる。初等中等教育分科会は教育課程部会と教員養成部会で構成されている。今回の諮問が、新しい時代の教育の在り方というとても大きなものであるため、初等中等教育分科会の中に、新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会が設置されており、10月４日、論点整理の案が示された。新しい時代を見据えた教育の将来像の方向性として、時代が変化する中での教育のイメージが２点あり、一つは「多様な子どもたちを誰一人取り残すことのない、個別最適化された学びが実現」していくことである。個別最適化のためにＩＣＴやＡＩ技術があり、必要な施策がこれから議論される。

もう一つは、全連小が訴え続けてきたことでもある、「全国津々浦々の学校において質の高い教育活動を実施可能とする環境が整備されているか」である。背景には教員採用試験の倍率の低下やＩＣＴ環境の格差などの是正があり、これから議論される。

⑷　新しい学習指導要領について

学習指導要領に初めて登場した前文をもう一度しっかりと読む必要がある。今回、理念が大きく変わった。新しい時代に変化を作っていくのは子どもたち自身であり、そのために必要な力を付けていかなければならない。これまでとは考え方は全く違うということが前文に書かれている。背景を考えながら我々がもう一度読み、教職員に伝えることが大切である。

３　報告　　司会　稲森 副会長

⑴　会務・事業・活動の大要　　佐藤 庶務部長

⑵　会計　　中谷 会計部長

・基金管理状況　・負担金納入状況

⑶　研究大会について

・秋田大会について　　小山 秋田県代表理事

・京都大会について　　杉森 京都府会長

開催日：令和２年10月29日（木）・30日（金）

⑷　要望活動について　　大字 対策部長

７月８日に、「小学校教育の充実に関する文教施策並びに予算についての要望書」を文部科学省、財務省、総務省へ提出した。我が国の義

務教育の質を高めるために、教育費の継続措置を講じられたいという大きな項目をはじめ９つの大項目、46点の内容の要望活動を行った。重点要望事項は、
①義務教育費国庫負担制度の堅持・負担率1／2の復元　②教員の基礎定数改善　③英語専科教員等の人的措置。詳細は要望書を確認し、各都道府県での要望活動に生かしてほしい。

また、教育関係23団体の全国集会が10月９日に行われ、教職員の定数改善や教育関係予算の充実を中心に要望した。

⑸　震災等災害被災県より

①被災３県小学校長会長との合同連絡会

大字 対策部長

７月８日に被災３県小学校長会長との合同連絡会を行った。岩手県・宮城県・福島県各会長、正副会長・常任理事、事務局長が参加した。各被災県からの報告後、情報交換を行った。今後もこの会を継続することを確認し、全国連合小学校長会として、人的支援継続の要望や震災を風化させない取組の継続を今後も行っていく。

②被災県からの報告

岩手〈東日本大震災について〉今年度までに被災した23校すべてが改修・新築工事を経て通常通りの学校生活を送れるようになった。校庭の仮設住宅も昨年度までにすべて撤去された。平成22年度と比較した児童数減少率は、被災地区が県全体（18％）の２倍以上（40％前後）になっている。震災から８年経過したが被災地全体の復興にはまだ時間を要する。子どもたちの心に寄り添ったきめ細かな指導には教職員の力が必要であり、加配の確保が最も重要である。震災を語り継ぐ、風化させないということが大切な時期になっている。「いわての復興教育」を県内全校で推進している。

千葉〈台風15号の被害について〉９月９日早朝に台風が上陸し、大きな被害が生じた。大規模な停電、断水があり、給食停止や通信障害が続いた。多くの学校が臨時休業を１日～数日行い、その対応として、40分授業として１日６時間行ったり、４時間に短縮していた日を５時間にしたりして指導内容に遺漏がないようにしている。これまで経験したことのない状況だが、各校長の的確な状況判断、その中での最善の方法の決断により、正常に近い学校運営を行っている。

佐賀〈九州北部豪雨被害について〉８月28日未明、これまでに経験したことのない大雨が県内各地に降り、川の氾濫・冠水、土砂崩れなどによる大きな被害が生じた。校舎の浸水や雨漏り等被害を受けた学校も多く、２学期が始まっていた学校は臨時休業をした。まだ完全な復旧はできていない。これを機に危機管理について教職員の共通理解を強くし、子どもたちの命を第一に考え、しっかりと安全対策を行っていく。

⑹　その他

・海外教育事情視察報告　　清水 視察団長

７月27日～８月２日に、正副団長以下17名の視察団は、ニュージーランドの学校訪問３校・教育関連機関・教育文化諸施設訪問・視察を行い、教育事情の把握とともに国際交流の実践を十分に達成した。

４　情報交換

「各県（市町）の校内体制について」

①標準的な学級編制基準

②専科配置の現状と教科担任制実施の状況

③教員の持ち時数の現状

北海道　①１・２年生35人、３年生以上40人。来年度から３・４年生も35人。②専科は理科・英語・体育が多い。③専科や加配等配置のない学校では25～28時間。外国語の時間数増で週29時間もある。

東京　①１・２年生35人（小２加配）、３年生以上40人。②図工、音楽（おもに３年生以上）は専科配置。算数少人数担当が加配。③授業時数21～23時間（クラブ・委員会活動を除く）。

宮崎　①１・２年生30人（少人数指導加配の運用）、３年生以上40人。３・４年生で35人検討中。②学級数により加配され理科、音楽専科配置。体育、外国語の専科配置もある。専科以外の教科担任制はいくつかの学校のみ。③授業時数20～30時間。

５　連絡・その他

広報部より　　平川 広報部長

・全連小刊行物等の活用及び価格改訂について

「速報（電子版）」「小学校時報」「教育研究シリーズ」「特色ある研究校便覧」及びホームページの活用をお願いする。全連小刊行物の価格を、消費税率改正に伴い、令和２年４月より改定する。

６　閉会のことば　　鬼澤 副会長